

奄美群島の学校だより 10 住用小学校

日 2023年2月5日 九州版 その他教育活動

印刷する ☆記事を保存する



1 学校や地域の様子

本校は、世界自然遺産登録地と国立公園に囲まれた児童数18名のへき地・小規模校である。地域にはへき地ならではの伝統や文化が根付き、八月踊りや豊年祭等の活動が行われている。また、学校近くの役勝川等では環境省から絶滅危惧種（レッドリスト）に指定されている「リュウキュウアユ」、三太郎峠では国内希少野生動植物種に指定されている「アマミノクロウサギ」が生息している。このように、たいへん貴重な環境に囲まれており、学習活動で地域の「人・もの・こと」を活用した教育活動を行うことが期待できる。しかし、一方で多くのへき地が抱える人口減少の問題等の課題もある。

2 リュウキュウアユの保護活動の概要

本校は総合的な学習の時間のテーマを「住用を明るくし、元気を届けようプロジェクト」とし、SDGs（持続可能な開発目標）と関連させて、子どもたち自ら地域活性化のための活動に取り組んでいる。

その活動の中で重点的に取り組んでいるのが、今年で16年目を迎えた「リュウキュウアユの保護活動」である。この保護活動のねらいは、『自然や人とふれあひながら、「知る活動」「守る活動」「伝える活動」の3つの活動を通して、地域や奄美の自然環境の素晴らしさに気付くとともに、その環境を持続させるための取り組みについて主体的・協働的に考え、豊かな郷土愛を育み、進んで地域や社会に参画しようとする態度を養う』ことである。

3 リュウキュウアユの保護活動の実際

「知る活動」では行政（住用支所市民福祉課）の協力の基、7月に鹿児島大学やリュウキュウアユの養殖専門技術者の方を講師に招き、リュウキュウアユの生態について学び、体験を通じた生息の確認のための観察を行っている。

「守る活動」では10月に地域や保護者、行政の協力をいただきながらリュウキュウアユの産卵地を整理している。丸くて適度な大きさの石に卵を産み付けるため、大きな石を取り除いたり、泥を取り除いたりする活動を行っている。

「伝える活動」では7月と9月に全校児童が地元ラジオに生出演し、観察学習の様子を伝えている。そして、環境問題を取り組むことの大切さを発信している。学校便りなどでラジオ出演の計画を地域も知らせており、地域の方から「ラジオで住用小の子どもたちが頑張っている様子を聞いてうれしい」等の多くの声が寄せられている。また、子どもたちの活動は全国や地方の新聞・雑誌にもたくさん取り上げられ、全国区で活躍する子どもたちの姿に地域からの喜びの声も寄せられている。

住用小学校（奄美市）リュウキュウアユの保護活動「知る」「守る」「伝える」の取り組み
（校長 山 美奈子）



校内で飼育している養殖のリュウキュウアユ



リュウキュウアユの保護観察の様子



校区内にあるマングローブでカヌー体験をする様子



ラジオ発表の様子

【全国版】

日本教育新聞WEB掲載
令和5年2月6日（月）

4 その他の活動

地域の活性化のために取り組んでいる活動は他にもあり、昨年度から湿度の高い気候を生かして「地域と協力した椎茸栽培」を始めている。

2月に行政（大島支庁）の支援の基、地域の方と一緒に子どもが駒打ちを行い、年末には収穫をした。椎茸を収穫する度に子どもたちの驚きと喜びの声が聞こえる。育てた椎茸は各家庭に持ち帰ったり、地域の方に配ったりしている。

この活動は継続して実施していく予定で、栽培が軌道にのってきた時には、子どもたちに「住用を明るく、元気を届けるために、椎茸を使って何かできないかな？」という探究課題を設定し、子どもたちが自ら考え、実践できるような活動を模索している。（例えば…地域の方を招いた椎茸まつり、家庭科で学んだ技能を生かして地域の方と一緒に椎茸料理の調理、奄美市給食センターへの提供等）今後も子どもたちが実社会や実生活から課題を見出し、課題を解決していく姿を見るのが楽しみである。



産卵地整地作業の様子



椎茸の駒打ちの様子



卒業制作の完成を喜ぶ子ども（地域の人に喜んでもらえるように国道沿いに作成）



椎茸の収穫を喜ぶ子ども

5 まとめ

今、学校はこれからの時代を生きる子どもたちに、予測ができない困難な課題を解決していく力を身に付けさせることが求められている。

本校は、自然体験を通じた学びの充実を図っている。自然はその時々で姿形を変え、子どもたちに未知の体験をもたらしてくれる。時には思い通りにいかないことも多々あり結果は多様に存在する。だからこそ、その結果を真に受け止め、個々の課題をもち解決に向けた知的好奇心を引き出してくれる。

このような知的好奇心が原動力となり新たな知を求め、主体的に学ぶ姿が期待できる。本校でもリュウキュウアユの保護活動や椎茸の栽培を通して子どもが目をきらきらさせながら学びを深める姿や、地域の方が子どもたちの活動の様子を見て喜ぶ姿を見ることができた。

近年、新型コロナウイルスの感染拡大によって人と人のかかわりが少なくなり社会に大きな課題をもたらしている。そして、それは子どもたちにも及んでいる。このような状況で学校が地域のコミュニティの場としての機能を果たし、そこに子どもの学習の場も取り入れることで、学校と社会はつながり、子どもたちが将来にわたって社会の中で学び続けられる環境が整うのだと思う。今後もカリキュラムの改善と工夫をしながら、社会に開かれた教育課程の実現に努めていきたい。